「廃屋の記憶」を生きる力に転化させる人

岡 三沙子詩集『わが禁猟区』に寄せて

1

岡三沙子さんは、詩人に多いロマンティストではなく、この世界の不条理を冷徹に記述するライターの眼差しを内に秘めた詩人だろう。岡三沙子さんの経歴を読んでいると、人生の節目を自らの強い意志で選び取ってきたことが分かる。その意志力の背景には、一人の人間が自己実現のために努力を惜しまない主体性の力強さを感じ取れる。一九三三年に秋田県の内陸部で豪雪地帯の合川町に生まれ、十歳頃に戦後には国道七号線沿いのダンプが行き交うことになる秋田市茨島の新興住宅地に転居する。秋田北高、秋田大学を出て小学校教諭になるが二年で退職し上京する。日本大学芸術学部に入学し、卒業後は新聞記者や、コピーライターなどの仕事を続けた。その後は結婚を期に家庭に入るが、ホスピスケア（死を迎えるための医療補助）や臓器移植をテーマにしたライターの仕事も続けていた。そして一九八三年五月に発生した「日本海中部地震での津波遭難遠足児童十三名」は、故郷の合川町の小学校後輩だったこともあり、その悲劇がなぜ起こったかを取材して真実を明らかにしながら、その悲劇の当事者たちとの運命的な出会いとなっていく。

岡さんは一九六四年に第一詩集『屍』、一九七一年に第二詩集『廃屋の記憶』を刊行し、一九八五年に詩とエッセイ集『アメリカの裏側では』一九九三年に『ドキュメント　運命の三叉路――学童津波遭難に揺れた秋田県合川町の十年――』を刊行した。また編集者としては一九九二年に秋田沖大地震・津波遭難児の遺稿集『岳彦の日記』や一九九五年に『消えた夏』松橋妙子著を世に出すために尽力した。その間も詩誌「あいなめ」や「海流」で詩を書き続けていた。岡さんにとって今回の詩集『わが禁猟区』は四十年ぶりの第三冊目の詩集となる。また詩とエッセイ集『アメリカの裏側では』の中に八篇ほどの詩があり、岡さんの原点ともいえる故郷の光景を書いたものの中に「坂道」という詩があり引用してみたい。

坂　道

急な坂道を下ると　わたしが
十まで育った生家がある
茅葺やねの流線が　日に光り
立ち上る水蒸気が
暖かそうに見えた
早春の凍てつく朝でも
手をかざしたくなるような
暖かさに見えた

坂を下りた窪地の一軒家は
町じゅうの陽だまりをかき集めて
たわわに実った果樹の楽園であったが
暴風雨に立ち向う術も教わった

父は
J・カーターのようには
農民を誇れなかったので
わたしの反骨は　土に戻ることであった
確かめると　不確かになってしまう
どこかの風景を抱えたまま　いま
もうひとつの坂道を歩いている
やっぱり
私の選んだ家は
大きな坂を下った木立の中にある
風当りを避けた本意は
セリを摘んだ豊かな湿地帯と
土を売って食い繋いだ　先祖の幻影に
酔うためだ
以来
虚飾の町は　冷やかな体面を崩さず
未だに
人生の始まりと終りの坂道に　迷う
目を瞑ると
坂を下って帰る家は
久しく帰っていない　生家である

秋田の合川という東北の自然に囲まれた場所に生まれたにもかかわらず、転居した秋田市内が自然を変えていく新興住宅地だったこともあり、岡さんは生家のあった合川町が本当の故郷として想起され続ける。また父の生き方への反発というか抵抗が底流に流れていて、「虚飾の街」とは、その批判精神の現われだったかもしれない。自然を破壊しながら「虚飾の街」を造りだす父のような建築に携わる者たちが、追いやっていった「農民の幻影」に岡さんは親近感を抱き続ける。坂下の芹が豊かに生える窪地にあった楽園のような生家の存在は、自分の心の中にしかないのだということを痛いほど分かっているから、詩篇の中で帰郷を繰り替えそうと試みていたのだろう。岡さんの心象風景の中では、坂の上から「虚飾の街」への違和感と同時に、失われていった暖かな故郷の光景に引き寄せられているのだろう。その両義的な引き裂かれている心象風景がこの詩には記されているように感じられた。

2

第一詩集『屍』からタイトルポエムの「屍」は、岡さんが果たさなければならなかった父との訣別が描かれている。しかしその詩の後に「父親」という父の悲しみを記した詩篇もある。この第一詩集で岡さんは精神的な「父親殺し」をしながら、子供たちから反発されても自己の立場を生きざるを得ない「父親の後姿」を同時に書き止めていく。そして子どもは決して「父の悲しみ」とは訣別できないことをも記している。「父親」を引用してみる

父　親

肩を並べた背が帰ってゆく裏側には
民衆駅ビルの鉄骨現場が
肉のこそげ落ちた父親の胸ぐらで立ちはだかっている
見えなかったふたつの距離が
どんどん大きくなって
友人や恋人たち
さては夫婦者まで
もとのひとりきりの部屋に帰ってゆこうとする
すべての決着を
ふたりの歩み寄りの過ちにゆだねながら——
ところが
彼らにだって
親子にはどんな悔い改めが残されているかを知らない
幾万の通行人の足跡を見守る夜の館(やかた)は
堂々と頼もしい父親の肩だが
〈おとうさん〉
と呼びかける息子や娘たちの甘えを
喉骨の奥で握りつぶしてしまう鉄のパイプだ
よく見ると
ひからびて疲れた
ひねこびれた老人で
暖かい言葉を返す余裕を
鉄の冷(ひや)やかさに封じ込めてしまった悲しみがみえる
それにしても
鎧戸を閉めて寝てしまった無人の街に
肩をいからせて踏んばる空しい鉄骨ビルは
おびえた子供たちの心を通りすぎる
父親の後姿だ

この詩を読んでいると、岡さんの「父親の後姿」と日本の戦後の都市が生み出したビル街とが、老朽化しても不景気で再建も出来ずに虚しく佇んでいる光景とダブってくる。戦後の高度成長やバブル時代を経た後に、成長が止まり減速から縮小していくデフレ時代に突入した現在にこの詩を読むと、とても分かりやすい。岡さんは一九六四年の高度成長のただ中で「父の後姿」を通して日本の社会の行く末を予感していたのかも知れない。その意味では、この詩は父という存在から社会の光と影を照らし出した優れた詩だと私には思われた。また「鎧戸を閉めて寝てしまった無人の街」の繁栄を担った父たちの世代の虚しさが具象的に記されている。

第一詩集の中で気になる詩篇があった。「校庭の孤独」という詩だが、この詩には、なぜ岡さんが教師を辞めて新しい道を切り拓こうとしていたか、その格闘が記されている。

校庭の孤独

校庭には沢山の孤独が捨てられていた
議論に負けた男子学生の苦々しく吐き捨てた唾
美しい女のひし折られた鼻っぱしら
仮そめの恋のぬくもり
踏みつけられた雑草の根もとで
捨てられたものたちの怒れない怒りが
交して欲しいいたわりの言葉を握りつぶしていた
ころがり込んだ黄昏のゴムまりは
探しくたびれて帰ってゆく少年たちの背へ
〈さようなら！　あしたね〉
と信じきった挨拶をおくったが
今夜のうちに
吹きだまりの孤独に帰ってゆくのは分りきっていた
失なったものの心を思い出すには
少年たちは
余りに何も失なってはいなかった
捨てられたものたちの涙の墓標は
憩いの旗印である
乾ききった人々は
誰かの涙で慰められることもあるのだから
横たわった夏のプールは
冬の防水槽では物足りず
空を飛ぶ鳥たちのフンをいっぱい浮かせて
捨てられたものたちと心から並んで
和したがっていた

この詩の初めの一行「校庭には沢山の孤独が捨てられていた」には、集団生活をおくる学校生活の一人ひとりの生徒の奥底を垣間見てしまった新任教師の恐れとおののきが語られている。集団生活に慣れ親しませるのが、教師の役割だが、岡さんはきっとそのことによって、生徒たちが一人の人間と

しての孤独を校庭に捨てていることに気づいてしまったのだろう。校庭で流された「涙の墓標」をあまりに感受してしまう岡さんの精神は、きっと教師には向かないと、数年で結論を出してしまったのかも知れない。岡さんが校庭で生徒たちと生きるには、自らの孤独を一番初めに校庭に捨てなければならないことに心を痛めたのだろう。しかし岡さんは夏のプールの水面に「捨てられたものたちと心から並んで／和したがっていた」ことを見てしまったのだ。教師の役割を超えて生徒の捨てた一人ひとりの孤独と付き合うことは、不可能なことではないかと考えたのかも知れない。それゆえ教師を離れて、自己や他者の内面を見つめようとする表現者になろうとする生き方を選んだのだと私には感じ取れた。

3

第二詩集『廃屋の記憶』には十五篇の詩が収録されていて、どこか溢れてくる郷愁に対してどのように振舞ったらよいかを冷静に自己分析しているように思われた。タイトル詩「廃屋の記憶」を引用してみる。この詩には岡さんの故郷での事件ともいえる「悲しみの記憶」なのだ。

廃屋の記憶

居間の壁に掛けてある二十号の絵　一羽の鶴が片足で立っているなんの変哲もない風景だが　一人になると　わたしは絵と向き合ったまま　遠いひとつの情景を思い起している　鶴は二本足にもかかわらず　一本足でしっかりと上体を支える習性があるのだろう　それが鶴の最適の姿勢だとすれば　人間とは　なんと違うのだろう　消え入りそうな淡色の渚で　鶴は豊かな風貌をみせている　この安らぎに浸っていると　簡単にはゆさぶることもできない現実が　激しく凄まじい勢いで崩壊するシーンを思い出す　安らぎの情景とはまるで裏腹な　いや　あの強烈な追憶は　安らぎの中に埋没される直前の　ごく自然な風化現象ではないのか　しかし　作者　T画家の市川の自宅を訪れるたびに　やっぱり　あれは耐えがたい屈辱と悲劇の物語だ　と　云いようのない悲しみに襲われる　それは　小学校入学前の　わたしにとって　最も幼い日の記憶である　雪どけの早朝の朝だった　秋田の片田舎　M村の高台にそびえるK医院が村人の手で　競売にふされようとしていた　結核で　院長はじめ家族の大半が逝き　悪霊に祟られた大きな家屋は　跡形もなく取り払われようとしていた　幸運か生き残ることがとにかく幸いであるなら　幸運と云う形容もおかしくない　一人の生存者　末娘は　東京の親類に預けられていて　この没落を確認する家族はなく　長い積雪に閉ざされた幽霊屋敷解体の日は　奇妙な興奮と活気に満ちていた　広い庭に持ち出された　おびただしい家財道具　医療器具　どれひとつ取っても　死霊に憑かれ　暗い蔭がさして　無気味な臭気を漂わせているのに　茶わんから箸の類までまたたく間に売りきれた　村には珍しい二階建洋風の館が　みるまにこわされ　何代にもわたる繁栄と名医の歴史は　あっけなく崩れ去った　長い苦しみの戦いは終ったのだった　気づいた時　眩しい陽光が　廃墟にさんさんと降り注いでいて　なにごともなかったように静まり返っている　人々は立去り　荒涼とした日射しの中に　わたしは一人　ぽつんと立っていた　厚ぼったい綿入れが急に重く　淋しさがぞくぞく肩のあたりからやってくる　あまりに静かで　恐ろしさに　泣くこともできない　この幼い日の孤独感は　わたしの心の奥底に沈んだまま　ひっそりと生息し続ける　生き残った末娘が　T夫人であることを知ったのは　大分たってからである　小太りで　仮にも美しいと云う表現はあてはまらないが　大きな目が　今でもなにかに耐えているふうで　わたしは正視することもできず　必死に　あの衝撃の思い出を閉じようとする　閉じても閉じても迫ってくる原色の風景の片隅に　あの日　立会ってはいない　T夫人が立っているのだ

詩「坂道」が故郷の場所を外から温かい心情で想起していたのだが、詩「廃屋の記憶」は、潜在意識に絶えずよみがえってくる、人の世の冷酷な現実を初めて知らされた恐るべき記憶だろう。岡さんは片足で立っている「豊かな風貌」の鶴の絵を眺めて安らぎを感じている。そんな時でも岡さんはその対極にある故郷の名士であった医院一家の洋館が解体されて、家財道具や医療器具が競売される光景をどうしても想起してしまうという。岡さんは、結核で医師一家の大半が死んだ後に残された末娘の心情に乗り移っていく。人の世の儚さを岡さんは幼い頃から胸に刻んでしまったのだろう。この世界では、いかに名声を博して富み栄えても、必ず滅んでいくことの無常さを語っている。その悲劇に耐えてそれを最後まで見届ける役もあるのであり、岡さんの詩の重要なテーマはその視線から書き記されていることが明らかになってくる。安らぎの中にも冷酷な悲劇の光景を忘却せずに語りださざるを得ない精神が岡さんの詩篇の中にはある。このライターとしての真実を見届けようとする精神が、自分の詩作のことよりも、〈『ドキュメント　運命の三叉路――学童津波遭難に揺れた秋田県合川町の十年――』を刊行し、また編集者として秋田沖大地震・津波遭難児の遺稿集『岳彦の日記』や『消えた夏』松橋妙子著などに向かっていった要因だろう。

それらの仕事を終えて、岡さんは長年書き溜めていた詩篇を新詩集『わが禁猟区』にまとめた。一章「わが禁猟区」には十二篇が収められている。初めの三篇は祖父母のいた暮らしを想起しながら書き記したものだ。冒頭の「いろり端の追憶」は、祖父母の昔話をききながら「重たい系譜から脱走」

しようと思い始める孫の複雑な心情が描かれている。また二番目のタイトル詩「わが禁猟区」は、母方の戦場に行き勲章ももらった祖父が森の動物の生命を軽んじた「殺しになれた心」を批判した詩だ。日本人はことさら家族の問題点を批判することを避ける傾向があるが、岡さんは祖父の「殺しになれた心」を半世紀たっても許してはいない。そして人の心の中に命を慈しむ「わが禁猟区」を持つべきだと告げている。この詩は岡さんの詩想を体現したような詩だろうと考えられる。「女三代・夢語り」は、かつて夢を語り合った三代の女たちは、現実ではありながら、現在の時点からはその夢そのものが変形されて、「迷夢」のような不思議な夢の世界に仕上がっている。岡さん中で意識的に現実と夢の交じり合った世界を構築しようと試みているように感じられた。二章「ひと月の不在」は、十三篇の詩が収録されている。都市で志を抱いて生きてきた岡さんの様々な心情や他者たちの姿などが、見え隠れする詩篇だろう。表現者としての視線は、他者や都市の底に確かに存在していた夢のような願望の屈折を明らかにしたかったのだろう。第三章「セーヌ右岸」には、九篇が収められている。旅に出発することを記した詩「失錯の夏」から始まる。岡さんは、いつも旅に出ようと心せかされているのではないか。日常は旅に出発するまでの準備期間のように感じているのかも知れない。また旅に出た後の自分の部屋が何も変わっていないか、その微細な変化にも心を揺さぶられている。また異国の光景の中でも、その場所の「廃屋の記憶」を発見してしまうのだ。その光景や人びとのただ中で、自分の故郷で体験した廃屋が壊されていくような音に聞き入ったりしている。その意味で岡さんは、絶えず世界の破壊と想像の両面を感じながらそれらを記述しようと試みている。そして「廃屋の記憶」を生きる力に転化させることがよりよく生きる唯一の方法であると、私達に実践的に伝えているのだろう。最後にタイトル詩「わが禁猟区」を引用したい。心に「ウサギ　きじ　きつね　たぬき……／みんなかわいい　わが禁猟区の仲間たち」を入れている人にぜひ読んで欲しい。この詩集の自己や家族の内側からの批評性は、読むものに多くの示唆を与えるだろうと考えられる。また故郷から離れても決して故郷から訣別できない人たちにも読んで欲しいと願っている

わが禁猟区

母方の祖父は　日露戦争の傷痍軍人で
ハンサムなガン・マニア
わたしが幼児のころ……

無口な老狩人は
どこかに古傷があるらしく

手か足か　肩の辺りをかばっては
銃口の向きを　人間から獣に変え
野山を　戦場のように駈けめぐっていた

いろりの煙がよどむ太い梁
午睡をむさぼる栗毛の馬が二頭いた
……と穏やかな　かやぶき屋根の庭先が
衝撃の風景に一変した

土間の奥　祖父の仕事場では
天井から逆さ吊りされた獲物が
瞬きを忘れた眼から　雫を滴らせ
中開きの口元に　鋭い呻き声を残して
抗議の姿勢を崩そうとしない
ウサギ　きじ　きつね　たぬき……
みんなかわいい　わが禁猟区の仲間たち
恐ろしさのあまり　遠巻きに
物語りの主人公の行く末を案じた
「さよなら」「ごめんね」が
わたしのささやかな祈り
最大級の償いは
殺人者を　鼻であしらうことくらいだった

「よう　今夜のごちそう何がいい？」
獲物の皮をはぎはぎ問いかける
猟銃使いの太っ腹
どんぶりで　どぶろく飲む
勲章を授かったえらいおじいさん
母が誇る実父でも
わたしは与(くみ)しない
口をきかずじまいで　別れた
敵弾にやられたのは
祖父の傷ついた足ではなく
殺しになれた心　と知った

なめした白ウサギの毛皮と
きつねのえり巻が届いた

「忘れて行ったみやげだ
温(ぬく)いよ　ほん物だからなぁ」
やさしい心遣いが添えてある
もうひとつの　銃弾をくぐった孫への
慰問だった

祖父が逝って半世紀
わたしはまだ　殺人者を許せない